春日部がもっと好きになる、まちの情報誌

kasukabe Plus

かすかべプラス

2014 SPRING/SUMMER vol.2

お祭り好きが集い、
元気がはじけるまち。



【春日部夏まつり】
熱く盛り上がる夏の日。
まちは一つの家族になる

【春日部藤まつり】
春日部が藤色に染まる季節

江戸後期から続く伝統の大凧あげ祭り

[大凧あげ祭り]

国選択無形民俗文化財（平成3年指定）
毎年5月3日、5月5日開催

江戸後期から続く伝統の大凧あげ祭り

西宝珠花（にしほうしゅばな）の江戸川河川敷で、毎年開催。
春日部の大凧あげ祭りは、東近江大凧まつり（滋賀）、
相模の大凧まつり（神奈川）と並ぶ、日本の三大大凧祭りの一つだ。
江戸時代から170年続く伝統行事の魅力と舞台裏に迫る。



江戸川の大空に舞う１００畳敷の大凧

春日部の大凧は全国でも有数の大きさだ。縦の長さが15メートル、横が11メートル。畳でいうと１００畳、ビルに例えれば４～５階建てに相当する。重さも８００キロと半端ではない。

作っているのは春日部市「庄和大凧文化保存会」（以下、保存会）だ。保存会は上若（かみわか）組と下若（しもわか）組に分かれ、それぞれが３か月もの時間をかけ、和紙と竹で毎年１張りずつの大凧を制作している。地元の子どもたちがあげる約15畳の小凧も作る。

大凧には、毎年公募で選ばれた文字が書かれ、初節句を迎えた子どもの名前を書いた紙が貼られる。大凧あげは「子どもたちの健康と幸福な成長を願う」お祭りなのだ。

祭り当日、大凧をあげるのは、保存会のメンバーや市民を中心に、市外、県外からの参加者も含め、百数十人である。

江戸川の土手に横たわる大凧。引き手はあげ綱を握り締め、河川敷で合図を待つ。合図を送るのは上若組・下若組の組長。大凧に寄り添い、風を読み、「その時」を待つ。引き手と５万人の観衆が見守るなか、凧が風をはらみ、ゆらりと波打つ。「その時」が来た。「カラン、カラン」、組長がけたたましく鐘を鳴らす。

「走れ！」「走れ！」。江戸川に響き渡る声に、百数十人が一斉に走り出す。大凧がふわりと舞い上がり始めた。「もっと走れ！」「全力だ！」。大凧はぐんぐんあ



がり、頭上の勇壮な姿に観衆から大きな歓声が湧く。



凧は「1畳に一人の引き手」と言われ、100畳であれば最低100人だが、風が強い日はさらに多くの引き手が必要とされる。

凧があがる瞬間、全身に伝わる感覚がやみつきに

「凧があがるあの瞬間、綱から腕に、腕から全身へと、何ともいえない感覚が伝わってくる。それが忘れられなくて、やみつきになっちゃうんだよ」

と語るのは保存会の加藤宏さん。大凧に魅せられ、65年以上携わっている。隣で頷く保存会の伊藤正一副会長が、

「凧あげは、風、いわば自然との勝負だから、毎年その感覚は違う。でも、綱の先頭だろうが、最後だろうが、あがる瞬間、綱を握っていた人だけが平等に味わえるものなんです」と加えた。

子どもの頃に凧あげの感覚を知ると、一度離れても、大人になるとまた地元に戻ってきて、あらためて大凧に関わる人が少なくないという。



凧はあげるものじゃない手伝うだけなんだ

「我々は凧があがろうとするのを手伝うだけ。凧の表情を見つめていると、風が凧の下に入り込み、凧がゆれる。まるで凧が自らあがろうとする瞬間がある。そのタイミングを見極めるのが大切なんです」と伊藤副会長。

凧があがろうとする「その時」まで、1時間以上待つこともあるし、「その時」が来ないまま、あがらない年もある。だからこそ、凧があがった瞬間に立ち会える喜びはひとしおなのだ。

凧があがる重要な条件は、主に三つある。

一つ目は、何といっても風だ。

「筑波山がきれいに見えると、たいてい凧がよくあがるんですよ」（加藤さん）

現在の会場で、凧がよくあがるのは、南東の風が吹いているとき。筑波山がきれいに見えると、この風が吹いていることが多いという。

二つ目が作り方。ちゃんとできていれば、ちゃんとあがる。実は、保管場所のない大凧を最終的に仕上げるのは、祭り当日。いわばぶっつけ本番だ。あげてみなければ、凧の出来のよしあしもわからない。

三つ目は引き手のチームワーク。当日になって初めて会う人ばかりのチームが、いかにまとまるかが鍵を握る。

「つまり、凧を制作する人とあげる人が一体になっていい仕事をしないと、なかなかいい凧あげにはならないんですよ」（伊藤副会長）

100人以上の大人が集結し、「凧を作ってあげる」というただ一つの目標のために邁進する。一人ひとりがきちんと役割を果たして初めて凧があがる。だからこそ、成功の暁には全員でやり遂げた達成感に胸が熱くなり、知らない者同士が涙を流して喜び合う。一致団結する楽しさも、大凧あげの大きな魅力の一つなのだ。



養蚕の豊作占いに始まる宝珠花地区の凧あげ

大凧あげ祭りの起源は、江戸時代後期、天保12（1841）年と伝えられている。この年、出羽国山本郡（現在の秋田県山本郡）の僧、浄信が、巡礼で宝珠花の小流寺に宿泊し、土地の人々を集めて、「凧あげをして養蚕の豊作占いをしてはどうか」と勧めた。

「凧があがれば、繭（まゆ）の値段が上がる」というわけだ。以来、宝珠花では、凧をあげて繭の豊作を占うようになった。

当時は舟による交通や運送が主流





大凧には初節句の子どもたち（男女）の名前が貼られる。5月3日には、立てかけた大凧の前で健康祈願のお祓いも行われる。市外や県外からの申し込みも多い（有料）。





小凧あげによって子どもたちにも着実に伝統ある「大凧あげ」の文化が継承されていく。



で、江戸川は東北や関東一円から江戸への物流の大動脈だった。宝珠花はその交通の要所として、また、地域経済の中心地として大変栄え、賑わいを見せた。

明治期に入ると、それまで繭の収穫前に行っていた凧あげを、旧5月の端午の節句に、男子出生のお祝いとして行うようになった。

明治20年～30年代には、家々で子どもの名前や紋章を書いた凧を作り、あげていたという。また、商家では凧の大小を競い合い、凧の糸目近くのあげ糸に鎌やカミソリをつけて、凧の切り合いをする「喧嘩凧」まで行われた。喧嘩が絶えなくなったことから、明治時代の後半から、上町と下町各一張りずつ、みんなで大きな凧を作るようになった。

こうして現在までその伝統が続くが、一度だけ上下（かみしも）が一緒になって大凧、小凧を作ったことがあった。昭和17（1942）年から5年間、大凧あげが中止された太平洋戦争後のことだ。





人々の熱い思いが凧あげの伝統を継承する

昭和22（1947）年、宝珠花村では大凧あげの復活を誰もが待ちわびた。とはいえ、物資はまだ十分ではなく、和紙も配給制。大凧を作れる状況ではなかった。しかし村民たちの願いは叶った。当時、埼玉県から「大凧あげのためなら」と特別に紙を配給されたという。重要な文化と考えられていた証である。村の人々は貴重な紙を使い、全員で協力して凧を作った。「民主」と書かれた大凧、「平和」と書かれた小凧が大空を舞う姿に、人々は感無量であっただろう。

幾多の危機を乗り越え、時代に合わせて変化しながら、宝珠花の大凧あげは170年も受け継がれてきた。その理由の一つについて加藤さんは、

「上若組と下若組は凧の作り方もあげ方も違う。お互いに技術を競ってきたから今があるのかもしれません」と語る。

伊藤副会長も、

「普段は仲がいいけど、凧あげのときだけはライバル。相手の凧が落ちれば喜んだりしてね」と笑う。

二つの組の競争心があったからこそ、地域の伝統が継承されてきたのだ。

今年も「春日部の空に舞う大凧を感じたい」と保存会の人々が動きだした。上若組も下若組も毎週末に集まって、凧作りに取り組んでいる。1500枚の和紙を一枚一枚貼りつけたり、骨造りをしたり、当日まで仕事は山ほどある。メンバーは20代から60代までの30名ほど。会社員や商店主、とび職や建設業などさまざまな職種の人が集まり、得意分野を生かして作業を進める。すべてが手弁当だ。





昭和32（1957）年、当時の書体は筆文字だったが、現在は千社文字で書かれている。

一日の作業が終わると、みんなで酒を酌み交わす。伊藤副会長が語る。

「お酒の場での会話は、全部凧の話。みんな好きだから何時間でも話せちゃう（笑）。こんな歴史があったとか、こういうときはこうすればいい、ってね」

幅広い世代の人が一緒になって作るだけでなく、膝を突き合わせて語り合うことで伝統は継承されていく。

最後に、保存会の糸井順一会長に今年の祭りにかける意気込みを聞いた。

「子どもたちの誕生を祝い、成長を願う大凧だから、ぜひ、大空高くあがってほしい。その勇壮な姿を一人でも多くの方に見ていただきたいですね」



風を読み、鐘を鳴らすのは両組長だ。右から阿部義明さん（上若組組長）、伴英彦さん（下若組組長）。

「大凧あげ祭りの引き手」募集

- 開催日程／5月3日（祝）・5日（祝）
- 会場／江戸川河川敷（宝珠花橋下流）大凧あげ祭り会場
- 対象／16歳～60歳で体力に自信のある人
  ※女性は小町凧〔小凧：縦6メートル×横4メートル〕の引き手
- 参加費／無料（法被（はっぴ）を貸し出します）
- 定員／各日100人（申し込み順）
- お申し込み方法／4月10日（木）（必着）までに、電話またははがき、ファックスで「引き手申し込み」と明記し、申込者の住所・氏名・性別・年齢・電話番号をご記入の上、下記までご応募ください。
  〒344-8577 春日部市役所商工観光課内 大凧あげ祭り実行委員会事務局
  （TEL 048-736-1111、FAX 048-733-3826）
- お問い合わせ／商工観光課（内線3314）

昨年の大凧あげ祭りの模様は「かすかべ動画チャンネル」でご覧いただけます。 http://www.youtube.com/user/KasukabeCity



【春日部夏まつり】

毎年7月13日に近い土・日曜開催

ソーレ ソレソレ！
熱く盛り上がる夏の日。
まちは一つの家族になる







夏まつりは御輿磨きから始まる

「春日部夏まつり」は、市のビッグイベントの一つだ。春日部駅周辺は交通規制が敷かれ、道の両脇に屋台がずらりと立ち並ぶ。道路は舞台と化し、和太鼓競演や、よさこいソーラン、流し踊りなどの催しが繰り広げられる。

圧巻は大人御輿のパレードだ。市内の各町内会に保存されている25基もの御輿が一堂に会し、かすかべ大通り周辺を練り歩く。この一大イベントを一目見ようと、2日間で25万人もの人が市の内外から押し寄せる。



大人御輿の始まる前、子ども御輿が町内を練り歩く。

春日部夏まつり実行委員長の関根慶剛（けいごう）さんも、「御輿の数といい、まちの盛り上がりようは他の地域に類のない素晴らしいイベントです」と胸を張る。

7月に入ると、各町内でまつりの仕度が始まり、まちはにわかに活気づく。

旭町では子ども会に所属する数組の親子が集まって、分解された御輿の部品をていねいに磨いていた。小学生のお子さんと参加した石山真理子さんは、「まつりは大切な文化。参加することで子どもの人生をより豊かにしてあげられると思う。何よりも、子どもがまつりを楽しむことで、自分の住んでいるまちを好きになってほしい」と語る。

旭町の田形全弘（たがたまさひろ）自治会長は、「御輿を磨くことが、まつりへの関心につながり、10年後、20年後、この子たちが伝統を受け継いでくれればいい」と目を細めた。



山﨑哲男さん　大砂在住
「まつりは青春そのもの。まつりを辞めたら、一気に年を取ってしまう」というほどのまつり好き。









まつりの日、町内は一つの大きな家族になる

大砂町内では、自治会のメンバーが東八幡神社に集まって、御輿の手入れや、神酒所（神酒などをお供えする場所）作りに精を出していた。長年地元に住んでいる人だけでなく、他の町から越してきた人も参加している。

自治会では、できるだけ多くの人にまつりを楽しんでもらいたいと、転入者には特に積極的にアプローチしている。黙々と作業をする釜井好人さんは4年前に市外から転入。自治会の呼びかけに「お御輿を担ぎたい」と手を挙げた。釜井さんは

「勤め人の自分にとって、まつりは準備期間を含め、地域の方々と親睦を深める絶好のチャンス。共に過ごす時間の中で、まつりのことだけじゃなく、人生について教えてもらうことも多い」と言う。



若い女性の担ぎ手も増えている。

大砂で生まれ育ち、約40年御輿を担ぎ続けてきたという山崎哲男さんは、「まつりは地域をつなぐかけがえのないイベント」と力説する。

「まつりには、御輿を組み立てる人、食事を用意する人、神酒所の留守番をする人、と多くの仕事があって、世代に応じた役割がちゃんとある。子どもも大人も町内が一つになって作り上げていくものなんです。その過程でみんなの距離が近づいていきます。

例えば、おにぎり一つにしても、婦人会のベテラン主婦が若い世代のお母さんたちに味つけを教えることから、世代間の交流が生まれ、関係ができあがる。そういう意味では、まつりの日は、1年に一度、町内が一つの大きな家族になる日なのかもしれません」



地域はまつりで一つにつながる。町内は大きな家族だ。


一宮町
一宮町

担ぎ手の声と観客の拍手が溶け合い、まつりのエネルギーは最高潮に達する。



まつり初日の午後6時、御輿のパレードが始まった。スタートは春日部駅の北東に位置する一宮交差点付近。一基一基、かすかべ大通りの大群衆の中を次々と西へ向かう。先頭を行くのは大砂だ。およそ100人が重さ500キロの御輿を担ぎ、練り歩く。

続くのは一宮町の御輿。鎌倉末期から伝わるといわれ、重さは1000キロもある。大池親水公園をイメージして緑色の房をつけた大池の御輿など、個性的な御輿も次々と連なる。

セイヤー、セイヤー。ソーレ、ソーレ。威勢のいい担ぎ手の声が響き渡ると、呼応するように見物人たちが拍手とかけ声を送る。23基（2日目は25基）の御輿すべてが出揃うのは、夜のとばりが降りる頃。提灯が灯り、闇の中を揺れ動く様はこの上なく幻想的だ。

通りは御輿と人であふれかえり、むせかえるような熱を帯びる。やがてパレードが春日部駅前に着く頃、かけ声、鈴の音、手拍子のすべてが大音量で混じり合い、まつりはクライマックスを迎える。

だが、御輿担ぎが終わらない町内会もある。例えば、大砂だ。御輿好きがいちばん担ぎたがるのは、御輿の前後に通っている担ぎ棒の先端部、「端棒（はなぼう）」である。どの位置より目立つポジション。ただ、端棒は御輿の傾きに大きく影響するので、本番では波が打たないようしっかり担げるだけの体力のある人に任せられる。

「そうすると、担げない人がいてかわいそうでしょ。大砂では、パレードのあと東八幡神社に戻って、『じゃあ、女の子だけで担いで』『今度は中学生入って』『最後は役員』って、いろんな人に端棒を担いでもらう。そうするとみんな喜ぶし、また盛り上がるんですよ」（山崎さん）

25基の御輿はすべて意匠が違い、工芸品として見ても美しい。



御輿パレードのルーツは八坂神社の祭礼

今でこそパレードという形をとっているが、もとは一宮交差点近くにある八坂神社の祭礼だった。

かすかべ大通り界隈は、江戸時代、宿場町として栄え、市も開かれていた。その市神（＝市場を守る神様）として祀られていたのが八坂神社だった。

当時の祭礼を記した資料には、宿内を御輿が渡御する記述が残り、大正期の八坂神社の祭礼絵はがきには、各町の御輿や山車飾りが映っている。

祭礼は戦後の一時期に中断したものの、やがて復活。昭和48（1973）年、市制20周年を記念して、夏まつりの御輿パレードとして、あらたなスタートを切った。今も夏まつりの1週間前になると、八坂神社に粕壁地区の24の地区長が集まり、〝御霊入れ〟の儀式が行われる。



夏まつりの1週間前に行われる〝御霊入れ〟。

八坂神社で儀式を執り行う押田豊宮司は、「それぞれの地域で御霊の入った御輿が担がれ、粕壁地区全体が元気になることを願って儀式に臨む」と言う。

50年の眠りから覚め、山車はよみがえった

2日目の見どころの一つは、御輿の前に登場する山車のパレードである。

昨年は御輿の前に3基の山車と屋台が出た。仲町町内会の「底抜け屋台」では、三味線・太鼓・笛・鉦の演奏と子どもたちの踊りが披露され、山車の上では江戸囃子が演奏された。次の八丁目新町地区の山車ではお囃子やおかめひょっとこ踊りなどが披露され、まつりの雰囲気を盛り上げた。

3番目に登場したのは内出町の山車だ。大正時代に造られたもので、高さは4.5メートル。ケヤキやヒノキをふんだんに使い、前後左右に美しい彫刻が施されている。この立派な山車は、実は昨年、内出町が旭町から譲り受けたものだ。きっかけは、自治会長の集まりの際に、内出町の新井陸雄会長が旭町の会長から受けた相談だった。新井会長が当時のいきさつを話してくれた。



「『組み立てのできる人がいなくなって、もう50年も山車を動かしていない。保管場所の確保にも困っている。どうにかならないか』ということでした。うちの町会には組み立てのできる者がいるけれど、すでに山車は持っている。悩みましたが、春日部市の歴史を刻んできた大切なものだから、捨てるわけにはいかない。ひとまず引き取って、いつか使わせてもらおうと考えていました」

ところが、地元の内出町に持ち帰って、町内の人たちに見せると「大きくて立派。今年のまつりでぜひ出そう」と、すぐに話がまとまった。5月初旬から有志が毎週のように集まって、一つひとつの部品を洗い、サビを落とし、彫刻を磨きあげた。山車は50年の眠りから目覚め、見事によみがえった。

そして迎えた当日。名前こそ内出町の山車だったが、内出町と旭町が一緒になって引いた。山車によって二つの町がつながれた瞬間だった。



平成11（1999）年、仲町町内会に復活した底抜け屋台。



まつりでつながる地域の強い絆

どのまちにも、長年まつりを支えてきた人がいる。その伝統を引き継ぐのは、ずっと地元で暮らしてきた人であり、新しく春日部に来た人でもある。まつりには不思議な力がある。人と人とを強く結ぶ力だ。まつりによってさらに地域の絆は深まっていくに違いない。

また、歴史を感じながら参加することで、違った視点からもまつりを楽しめるはずだ。今年の春日部夏まつりが今から待ち遠しくてならない。





第41回春日部夏まつりの模様は「かすかべ動画チャンネル」でご覧いただけます。 http://www.youtube.com/user/KasukabeCity

春日部 藤まつり

4月最終日曜日開催

春日部が藤色に染まる季節



第33回 藤まつり
●開催日程　4月27日（日）
●時間　式典：10時40分～／パレード：11時～／各イベント：12時30分～
●場所　春日部駅西口「ふじ通り」
●主催・問い合わせ　春日部市コミュニティ推進協議会事務局（TEL 048-731-3550）

ふじ通りを彩る、楽しいイベントが盛りだくさん

春日部駅西口のふじ通りを舞台に、今年も「藤まつり」が開催される。

この季節、長さ１０８０ｍのふじ通りには、２１８本もの藤が美しく香しい花を咲かせてくれる。

藤まつりは、昭和57（１９８２）年から、地域コミュニティの活性化のために行われ、今年で33回目。市の内外からは毎年15万人以上の観光客が訪れる。



小、中、高校生たちが登場するパレードは、市役所通り側から南方向に進んでいく。

まつりを彩るのは数多くの団体だ。全国大会連続出場の市内中学校吹奏楽部によるマーチングやバトンクラブ、流し踊りのパレードをはじめ、よさこいソーラン、和太鼓のパフォーマンスなどが繰り広げられる。また、さまざまな市民団体が出店する模擬店もまつりの楽しみの一つといってよい。

同じ時期、藤の牛島駅からほど近い「牛島の藤＊」に足を延ばすのもいい。国特別天然記念物指定の藤は、樹齢１２００年。２ｍを超える花房は圧巻だ。

子どもの企画参加からまちを愛する心を育む

藤まつりでは、毎年、子どもたちに向けたイベントが開催されている。

「去年は交通安全をテーマに、パトカーや白バイを展示するようなブースを組みました。子どもに楽しく実体験しながら学んでもらい、子ども免許を発行したりもしたんですよ」と春日部青年会議所の理事長、宮下智義さん。

今年は学生にも参加を呼びかけ、子ども向けの体験型企画を準備しているとのこと。ユリノキ通り付近の第６会場には注目だ。



公益社団法人 春日部青年会議所
春日部市粕壁東1-22-10 3F
TEL 048-761-0032
http://www.kasukabe-jc.com/



市民吹奏楽団によるミニコンサートも楽しめる。

＊藤花園「牛島の藤」の詳細は、こちらをご覧ください。http://www.ushijimanofuji.co.jp/





右／大凧のヘッドマーク付き電車は、埼玉県を飛び出し、東京、神奈川、千葉まで駆け抜けました。2013年4月下旬から5月にかけて期間限定。左／年末年始には、東京スカイツリーに大凧をモチーフにした凧が展示されました。訪れた観光客の絶好の撮影スポットとなり、「東京スカイツリータウン」に華を添えました。

春日部を飛び出し、世界へ羽ばたけ！

“春日部”をPRする大凧たち



国道16号線に面した庄和総合公園内に立つ大凧の原寸大の看板です。看板下の人と比べると、その大きさは一目瞭然です。



気象予報士
平井信行さん



WBAスーパーフェザー級
チャンピオン
内山高志さん

かすかべ親善大使の平井さん、内山さん。平井さんが手にするサイン入りの飾り凧は、大使8名分揃って「ぷらっとかすかべ」にて展示しています。内山さんのV8達成祝賀会でも、壇上には凧が展示。



“食べられる”大凧たち。いずれも、かすかべフードセレクション認定商品。上から、上昇大凧せんべい（味好堂さん）、春日部大凧さぶれ（ダルトワさん）、春日部大凧焼（広島流お好み焼き 七夜さん）。

Episode1

凧一色の人生です

春日部市「庄和大凧文化保存会」／小川寛さん

小川さんの人生は凧一色だ。小学5年生から凧あげに参加して以来、凧に夢中。50年にわたり凧人生を歩んできた。自宅には、全国各地の凧にとどまらず、世界各国の凧まで飾られている。

一昨年まで高校の英語教員だった小川さんは、授業中に凧話で脱線することもしばしば。ついには、校内に凧研究部を創部してしまった。今でも当時の生徒の結婚祝いに凧を贈るそうだ。

凧を通じた交流は海外にも広がっている。得意の語学を生かし、これまでカナダやオーストラリアなど10か国で国際交流を図ってきた。

そんな小川さんに今後の目標を尋ねた。「世界各国の人たちと凧を通じて交流したい。特にヨーロッパの凧を知りたいですね」。小川さんの凧人生はまだまだ続く。



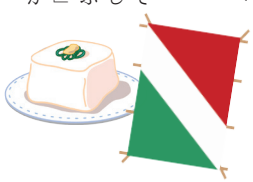
自宅には国内外の貴重な凧が数多くある。

Episode2

大凧の不思議

その1
大凧には、現在「赤」「緑」「白」の3色が使われている。右上の赤色は太陽、左下の緑色は大地、真ん中の白色たすきは江戸川の流れを表現しているそう。かつては、緑ではなく青色だったとか？

その2
祭りの朝、なぜか大凧の前で揃って“豆腐“を食べる習わしがある。豆腐にあやかって、「ぶつかってもケガをしないように」「豆腐で清める」などの諸説が存在する。



<こちら、シティセールス広報課です!>

INFORMATION

クレヨンしんちゃん絵はがきセット、春日部市内で好評発売中!



今回誌面に登場している「大凧あげ祭り」や「ふじ通り」などが描かれた、オリジナルデザインの絵はがきセット。春日部でしか手に入りません。5種類×各2枚の計10枚、特製ミニクリアファイルとしおりに使える領収書付きで200円。郵送でもお申し込み可能です。

「クレヨンしんちゃん」©臼井儀人／双葉社・シンエイ・テレビ朝日・ADK

販売場所:春日部市役所シティセールス広報課、ぷらっとかすかべ、道の駅「庄和」、庄和総合支所市民窓口課。詳しくは市公式HPへ。

飾り凧のオーダー受け付けます!

春日部情報発信館「ぷらっとかすかべ」
住所:春日部市粕壁1-3-4／開館時間:9:00～16:30／TEL:048-752-9090／休館日:月曜(月曜が祝休日の場合は翌日以降の平日)、年末年始／駐車場:なし／アクセス:春日部駅東口から徒歩約3分

商工振興センター「アクシス春日部」
住所:春日部市粕壁東1-20-28／営業時間:9:00～17:00／TEL:048-761-3181／休館日:年末年始／駐車場:あり／アクセス:春日部駅東口から徒歩約7分

道の駅「庄和」
住所:春日部市上柳995／営業時間:本館 8:00～19:00、食彩館 9:00～19:00(店舗により異なる)／TEL:048-745-1481／休館日:1月1日、2日／駐車場:あり／アクセス:庄和インターより国道4号バイパス北側約800m右側

★料金、サイズなどはご相談ください。★製作期間は2週間程度です。
★凧に書く文字は3文字以内でご注文ください。

PRESENT

感想をお寄せいただいた方、抽選で各3名様に「名入り凧」または「町名入り手ぬぐい」プレゼント!

webでも受付中! 詳しくは「かすかべプラス」で検索!

●応募受付期間
平成26年4月1日(火)～平成26年7月31日(木)必着

●応募方法
①市公式ホームページ内専用ページからご応募ください。→ かすかべプラス で検索!
②官製はがきに以下の項目をご記入の上、ご郵送ください。
□お名前・性別・年齢・ご住所・電話番号　□ご希望の商品名
□本誌の入手先　□よかった記事(ページ番号)　□ご意見・ご感想
□名入り凧をご希望の場合は、希望する文字(3文字以内)
《応募宛先》〒344-8577　春日部市中央六丁目2番地
春日部市役所シティセールス広報課　かすかべプラス第2号プレゼント係



※賞品の当選は、発送をもって発表に代えさせていただきます。
※応募の際にご提供いただく個人情報(氏名・住所等)は当企画以外の目的には使用しません。
※手ぬぐいは色を選べません。

EVENT

4/19(土) ジャズデイかすかべ2014春
ジャズでまちなかに賑わいを!



「ジャズで、まちなかに賑わいを作ろう」との熱い思いから始まった音楽イベント。春日部のうまいものを食べながら、気軽にジャズを楽しもう!

場所:中央町第4公園ほか
問合せ:ジャズデイ かすかべ実行委員会事務局(春日部商工会議所)
TEL:048-763-1122

6/1(日) 粕壁エイサーまつり
沖縄の伝統文化に触れる!



沖縄パワーで賑わい作り。沖縄グルメを堪能しながら、地元の子どもエイサー隊や琉球國祭り太鼓の力強い演舞を見に行こう!

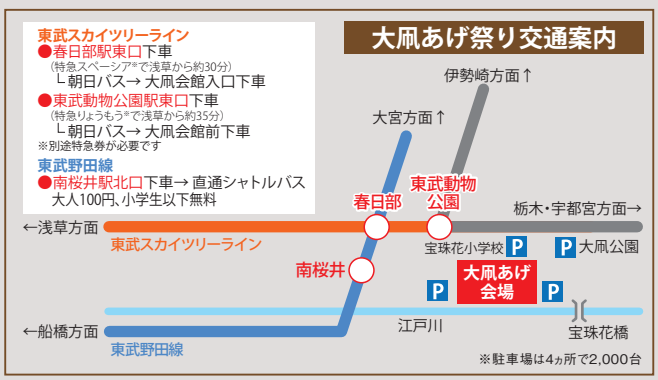
場所:商工振興センター「アクシス春日部」
問合せ:粕壁エイサー祭り実行委員会事務局(春日部商工会議所)
TEL:048-763-1122

8月下旬の土曜日 春日部コミュニティ夏まつり
心ふれあう、住みよい地域社会をめざして



緑に囲まれた公園で開かれる夏まつり。盆踊りや阿波踊りに自由参加できます。

場所:庄和総合公園
問合せ:市民活動センター「ぽぽら春日部」
TEL:048-731-3550



[編集後記]

春日部の魅力を掘り起こす情報誌。今号のテーマは、春日部を代表する「祭り」としました。

大凧あげ祭りの取材では、5月3日、5日の両日とも上若組、下若組の大凧があがるという"歴史的瞬間"に立ち会うことが出来ました。初めて参加した大凧あげ祭り。右も左もわからず、組長の鳴らす鐘の音を聞くと同時に無我夢中で河原を全力疾走。息を切らしながらも、大空に舞う大凧を見上げ、引き手全員での万歳三唱は感無量でした。

一方、夏まつりの取材では、町会の方々の、「祭りを通じて子供たちに地域の伝統や魅力を伝えていきたい」と語る優しい眼差しが印象に残ります。祭り当日の見どころは、何と言っても25基の御輿が連なるパレード。御輿を担ぐ粋な大人たちの熱気と勇壮な御輿が波打つ光景は圧巻でした。

もうひとつ忘れられないのは、取材中に差し入れで頂いたおにぎりの味です。それは、地域の方々の、まさに「おもてなしの味」でした。市内では、この他にも様々な伝統行事や、祭りが数多く行われています。それらの伝統、文化を支えているのは、そこに暮らす人々の熱い思いや地域の絆であることを改めて感じています。

川村明　宮下帯子　重枝紗智子
山崎嘉那子　小俣智
(春日部市シティセールス広報課)



表紙の人:左から、春日部市「庄和大凧文化保存会」の加藤さん、糸井さん、伊藤さん。撮影場所:小流寺

春日部がもっと好きになる、まちの情報誌
kasukabe+ 2014 SPRING/SUMMER

制作協力・印刷・製本　共同印刷株式会社

＊本誌の無断転載・複製を禁じます。

発行日　平成26年3月
発　行　春日部市シティセールス広報課
〒344-8577 埼玉県春日部市中央六丁目2番地
tel 048-736-1111
ISSN 2188-1928

春日部市